
北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 60, 2021. 6

ボランティアニュース第 60 号に寄せて	藤田 正一 1
第 60 号発行へのお祝いと感謝	大原 昌宏 4
ボランティアニュース第 60 号を祝して	在田 一則 5
人工衛星にかける夢	久末 進一 6
「ミウラ折り」について	山岸 博子 7
ボランティア活動を振り返って	星野 フサ 8

特別寄稿

ボランティアニュース第 60 号に寄せて

第 1 号発行当時の博物館長 藤田正一

ボランティアニュース進化論

2005 年、A4 判 1 枚裏表 2 ページでスタートしたボランティアニュース第 1 号は、今や、60 号を数え、ページ数も 8 ページにまでなる充実ぶりだ。

読み物ありで、当初目的とした会員相互のコミュニケーションから、それを超えて、対象も来館者や世間一般の人々に対するものとしても十分に耐えうるものとなっている。特に、人物伝シリーズなどは、その人物を直に知る方からの貴重な証言にもなっている場合があり、歴史的な記録として、保存価値の高いものになっている。ボランティアニュースの継続に関わった諸氏の努力と見識に感謝と敬意を表したい。

ここで、これを機に、大学博物館の使命と、それを支えるボランティアの役割、そして、ボランティアニュースの果たす役割とその将来に向けての発展性を考えてみよう。

大学博物館の使命、教育研究、社会貢献と博物館ボランティア

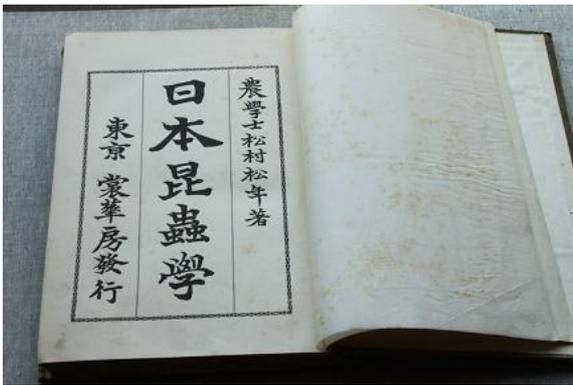
大学博物館は言うまでもなく、教育研究機関の博物館である。したがって教育の現場としての利用に対応できる体制が必要である。すなわち、実物を使った教育のために利用可能なように展示、収蔵、管理が必要である。また、博物館は研究の現場でもある。博物館の収蔵庫には学術上重要な標本が沢山ある。

博物館の研究者は自らの研究による博物科学の



ボランティアニュース創刊号

ボランティアニュースは実に 16 年間、博物館ボランティアの手によって途絶えることなく発行され続けているのである。まさに継続は力なり。その内容は、博物館ボランティアの活動中の貴重な発見など、文字通り博物館関係のニュースとともに、ニュース性はなくても貴重な情報の発信あり、活動報告あり、他の博物館の情報あり、興味深い



松村松年先生の著書と昆虫学教室

発展への貢献とともに、現在・未来の学内外の研究者が利用可能なように標本・資料の収集、データベース化、標本作成、収蔵管理、展示に寄与する必要があります。標本の後ろに、開学以来それらの標本に関わった多数の研究者がいる。また、それらの研究者を支えてきた協力者・ボランティアがいる。そして、ボランティアによる埋もれた貴重な資料の発見も少なくないのである。

大学博物館は大学の社会に開いた窓口であり、大学からの情報発信と広報の場であるとともに、大学の地域貢献の拠点である。大学博物館は大学の研究の一端を市民に見ていただき、触れていただき、大学への理解を深め、大学への信頼とサポートを高めていただくための装置でもある。

また、大学の文化の発信拠点でもある。大学で行われている研究などを、実物をもって社会に公開、発信する。大学からの文化を市民も享受する。展示、解説、市民講座などによる興味の喚起、啓発、そして、総合学習、生涯学習に対応などへの貢献も期待されている。

また、大学にとっては、大学の広告塔としての機能も博物館は担っている。すなわち、大学の宣

伝、高校生等のアピールなども博物館を中心とした展示や発表、その他の活動により有効に行われ得る。

これらの各項目を眺めて、ボランティアの皆さんは、「あっ、この項目には私が関与している」と感じる箇所があるはずである。これらの各項目をサポートしているボランティアが必ずいる。もはや、北大総合博物館はボランティアの協力なしには機能しないほどに、ボランティアは重要な存在となっている。すなわち、博物館ボランティアは博物館の役割、教育・社会貢献そのものの一端を担っているのである。博物館ボランティアの皆さんが自らに課したこれらの使命とともに、ボランティアの活動は学びと自己啓発の貴重な機会でもあると思う。そして、ボランティアニュースの紙面もまた博物館の使命を支えるボランティア相互の情報交換のみならず、自己啓発の場、学習の場となっている。また、冒頭に述べたように、ボランティアニュースは外へ向けての博物館活動の情報発信手段としても、重要情報の記録手段としても、重要な役割を担いつつある。すなわち、今や、ボランティアニュースそのものが博物館の使命を



チェンバロコンサートの様子



展示解説の様子

遂行するための一翼を担っていると言っても言い過ぎではないのである。

ボランティアニュースの今後

北大総合博物館の発展を願う上からも、ボランティアニュースが今後とも長く継続されることを望むものであるが、記事を集める、あるいはテーマを考えて執筆を依頼することだけでも相当の苦労があると思う。その苦労を軽減するものとして、そして、何よりも興味深いからであるが、2つのシリーズ記事を提案したい。

その一つは、標本にまつわるストーリーのシリーズ化である。北大には、その歴史以上に古くから集積された標本がある。そして、その標本の一つ一つに背景のストーリーがあるはずである。その標本を誰が、いつ、どこで、どんな経緯で、どんな状況下で発見したのか、それはどんな重要性があるのかなどである。その中でも面白いストーリーの付随する標本を選んで、そのストーリーとともに標本を紹介してほしい。学術上重要なタイプ標本は勿論だが、例えば、クラーク苔、中谷宇吉郎の雪の結晶製作装置、うさぎの耳のタール癌、広井 勇のコンクリートテストピースなどにはそれらにまつわるナイスストーリーがある。すでに単発的に紹介されたものがあるかも知れないが、毎号1つの標本あるいは展示物を選んでシリーズで紹介していただければ、ほぼ無限にシリーズを

で早くから固有の建物を持つ恵まれた環境があり、学術的に貴重な標本も多く、来館者も多く、国内の大学博物館としてはモデルとなり得る博物館である。こうしたことから、大学博物館の、ある意味で見本となり、指導的な役割を担わされているとも言えるのである。大学博物館協議会の下に、博物科学会を創設したのも、北大総合博物館のリーダーシップからであった。調べたわけではないが、「ボランティアニュース」類似の刊行物を発行している大学博物館ボランティア組織はまだ少ないのではないかと。他大学のボランティアとの情報交換で得られるメリットは大きいと考えられるが、全国の大学博物館ボランティアが一堂に会する機会も、ネットワークもまだない。せめて、ボランティアニュースの交換ぐらいができればいいのではないかと考えるが、そもそもボランティアニュースを作成・発行しているボランティア組織も少ないのでは、なかなかそうした交流が難しい。北大の博物館ボランティアがリーダーシップを発揮し、全国の大学博物館ボランティアに呼びかけて（と言うと、おこがましいと言われるかも知れないが、例えば、北大総合博物館ボランティアニュースを他大学博物館に送付するなどして、それとなく）ボランティアニュース的なものを刊行してもらう機運を高めてもらうことなどはできそう。毎号、シリーズでボランティアニュースに、他大学のボランティアに執筆をお願いしたり、他大学の記事を紹介したりすることで交流も生まれよう。内輪では考えられなかった気づきがあるはずである。それらが問題解決や発展につながる可能性があると思える。

この16年でボランティアニュースは会員相互のコミュニケーション手段から、館内外の人々に対する情報の発信と共有、重要事項の記録、学習と自己啓発の場としての役割を帯びるなど、大きく発展してきた。これらを継続し、さらに発展させ、大学の枠を超えて、国内の博物館ボランティア相互の情報交換、コミュニケーションの場、相互学習と啓発の場としての機能も付加することも一つの方向性であろう。これまでのボランティアニュースの成長ぶりを見るにつけ、今後の成長が楽しみである。



市川厚一先生とウサギの耳のタール癌

継続できるだろう。こうした記事は、未来に向けてアーカイブすべき貴重な記録ともなる。

もう一つは、紙面を通しての他大学の博物館ボランティアとの交流である。

北大総合博物館の国内的位置付けを考えてみると、東大博物館、京大博物館、芸大美術館と並ん

第 60 号発行へのお祝いと感謝

北大総合博物館教授 大原昌宏

60 号の達成おめでとうございます。

ひとえにボランティアニュース編集部の皆さんの絶え間ない努力の賜物だと思います。「北大総合博物館ニュース」より、ずっと面白く内容の充実したレベルの高い「北大総合博物館ボランティアニュース」というのは、博物館業界では常識となっているようです。心からお祝い申し上げます。

振り返ると、北大総合博物館のボランティアの第一人者は、昆虫ボランティアの梅田邦子さんでした。2000 年に、まだ 1 階の常設展示もなかったころ、昆虫標本の資料整理のためにお願いをさせていただいたのでした（梅田さんには現在もボランティアを続けていただいています）。二人目は、まだ中学生だった化石ボランティアの千葉謙太郎さんだと思います。現在は化石研究者となられて岡山理科大の講師をされています。

ボランティア制度の発足当初、私は箕浦名知男先生と同室でしたので、昆虫のボランティアの指導に来ていただいていた久万田敏夫先生（初代ボランティア会長）と、化石ボランティアの中野 系さんが、私たちの部屋でお茶をしながら歓談されていたのを覚えています。また、忘年会、新年会の時は、教員、職員、学生、ボランティアが共同研究室に集まり、親睦を深めておりました。現在は、人数が多くなり、会場も「知の交流」に移りましたが、当時は共同研究室の 50 m²ほどの部屋で身内感覚でワイワイやったものでした。

その後、ボランティアは、植物分野では植物園で活動をされていた方々が総合博物館に移行して来られ、地質、考古、展示解説、翻訳など分野が増え、次第に活発で賑やかな博物館ボランティアの人々のコミュニティができあがっていきました。特に藤田正一元館長の関係から、遠友学舎クラーク講座の受講者の多くの方にボランティアとなっただき、北大の全学的な背景を持つ方々が参加され、博物館のボランティア人材の幅が一気に広がったものと思います。

2001 年にボランティアの会の初会合が行われています。2005 年にはボランティア室（N302）が設置され、同じ年にこの「ボランティアニュース」が創刊となっています。当時、ボランティアの人数が増え始め、お互い廊下ですれ違っても、どの分野で何のボランティアをしているのかもわからない状況は良くないと、交流の冊子を当時の院生だった望月 直さんらが中心となって、このニュースを発行してくれたと記憶しています。現在も編集の中心的役割をいただいている星野フサさんには、このニュース立ち上げ当時から関わっていただいています。感謝です。

現在（コロナの関係で少し減少しましたが）、ボランティアの数は 16 分野 184 名となっています。各分野とも、ボランティアの方の活動なしには、業務が立ちいかなくなるまでになっており、ボランティアの存在意義が高まっていることは私が言うまでもないことと思います。社会貢献、生涯学習を考えると、この北大総合博物館のボランティア活動は、ひとつの良いモデルになるのではないのでしょうか。

これまでのボランティアの方々活動を振り返ると、会長や幹事として大きな貢献をくださった方々、久万田先生、中野さん、沼田勇美さん、寺西辰郎さんが既にご逝去されており、時間と歴史を感じます。皆さんのこれまでの多大な貢献への感謝と、今後のボランティアの方々のご健勝とライフワークとしての活動の継続を祈念し、筆をおきます。

おめでとうございます。

活動報告

ボランティアニュース第 60 号を祝して

ボランティアの会会長 在田一則

2019 年 12 月に中国武漢市で発生した新型コロナウイルス (COVID-19) が 2020 年 2 月のさっぽろ雪まつりの頃に札幌でも現れてからもう 1 年半が過ぎようとしています。この間、総合博物館は 2020 年 2 月 29 日～7 月 13 日と 2021 年 5 月 3 日からとの 2 回の長期臨時休館となり、ボランティアの皆さんの活動もままならない状態が続いています。現在、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐ基本と言われている三つの密 (密閉・密集・密接) を避けるため、「ボランティア談話会」や「博物館に押しかけよう会」などの活動もほとんど行われていません。記録によると、「談話会」は 2019 年 7 月 5 日の第 34 回「日本の叙情歌 詩の朗読とポプラチェンバロの響き～童謡 100 年に寄せて～」が最後、また「博物館に押しかけよう会」は 2020 年 2 月 29 日に予定されていた第 29 回「小樽総合博物館運河館」が中止になっています。毎年 5 月後半に開催しているボランティアの会総会も昨年 (第 18 回) に続き、今年 (第 19 回) も開催できませんでした。

そうした中で、「ボランティア ニュース」(以下では「ニュース」) は頑張ってきて来ました。2005 年 2 月に創刊号が発行された「ニュース」は第 12 号 (2009 年 3 月) から季刊 (3 月・6 月・9 月・12 月) の定期刊行となりました。総合博物館は、耐震工事のため、2015 年 4 月 1 日～2016 年 7 月 26 日の間展示公開が中止となり、ボランティアの皆さんの活動も不規則になりました。しかし、「ニュース」は、総合博物館やそこで行われているボランティア活動を市民の皆さまに紹介することともに、ボランティアどうしの相互親睦や情報交換の場や学習の場であり、また博物館教職員とボランティアの相互理解の場でもありますので、発行を継続しました。そしてこのたび第 60 号の発刊に至りました。

「ニュース」の内容はその時々で多少の変化はありますが、主に「展示の紹介」、「ボランティア

グループの活動紹介」、「ボランティア談話会報告」、「博物館に押しかけよう会報告」、「訪問博物館の紹介」などですが、加藤 誠名誉教授 (当時総合博物館資料部研究員) からご寄稿いただいた「ネスパ? の長尾先生」(第 13 号、2009 年 6 月発行) が契機となって始まった「〇〇先生小伝」は特異な連載記事です。総合博物館 1 階の知の交流ホールの壁には北大の大先生たちの写真が飾られていますが、その先生たちの知られざるエピソードなどを交えた「小伝」をお弟子さんやご遺族の方に書いていただくというのがこの記事の趣旨です。これまでに以下の 9 名の先生方について直弟子や孫弟子、ご遺族の方々に書いていただきました。「長尾 巧先生小伝」(加藤 誠さん: 孫弟子、第 13 号～16 号)、「松村松年先生小伝」(久万田敏夫さん: 孫弟子、第 17 号～22 号)、「中谷宇吉郎先生小伝」(樋口敬二さん: 直弟子、第 24 号～29 号)、「木原 均先生小伝」(木原ゆり子さん: 令嬢、第 30 号～35 号)、「舘脇 操先生小伝」(五十嵐恒夫さん: 直弟子、第 42 号～44 号)、「栃内吉彦先生小伝」(栃内香次さん: 令孫、第 45 号～48 号)、「高倉新一郎先生小伝」(高倉嗣昌さん: 令息、第 49 号～52 号)、「半澤 洵先生小伝」(半澤 久さん: 令孫、第 53 号～56 号)、「内田 亨先生小伝」(山田真弓さん: 直弟子、第 57 号～59 号)。このシリーズはたいへん好評であり、また北大を理解していただく資料としても貴重なものと思いますので、今後も継続して行きたいものです。

最後になりますが、日頃、「ボランティア ニュース」の記事集めや原稿執筆依頼に奮闘され、そして素晴らしい紙面のレイアウト作りや大量の印刷に苦勞されている編集委員の皆さんに、改めて感謝しお礼を申しあげます。

今後も、ボランティア活動の広報と情報交換の媒体である「ボランティアニュース」へのご協力とご支援をよろしくお願い申しあげます。

活動報告

人工衛星にかける夢

図書ボランティア 久末進一

室蘭工業大学(室工大)と大阪府立大学が協力し、学生、大学院生、教員らで共同開発した超小型人工衛星「ひろがり」が宇宙航空研究開発機構(JAXA)を経て本年2月、米航空宇宙局(NASA)飛行施設から民間ロケットで国際宇宙ステーション(ISS)に向けて打ち上げられた。3月14日に宇宙空間へ放出され、アマチュア無線帯における高速通信技術の実証およびパネルなどの展開構造物と計測手法の宇宙空間での実証の二つをミッションとしている。その技術研究が航空宇宙工学の新たな展開として注目されている。

「ひろがり」は縦横10cm、高さ20cm、重さ2.5kg。室工大航空宇宙機システム研究センター(センター長、内海政春教授)が中心になって、大きな紙を小さく畳む折り紙工学「ミウラ折り」を応用し、実験に用いる厚さ2mmのプラスチック製パネルを計16枚つぎ合せた12cm四方の「ミウラ厚板構造」を開発した。電子回路、バッテリーとともに衛星に搭載した。ロケットで打ち上げられた後、補給船でISS日本実験棟「きぼう」に運ばれ、宇宙飛行士の野口聡一さんがロボットアームでドッキング回収。宇宙放出され、「ミウラ折り」は、見事に開いて成功したという。

野口さんに続いてISSには星出彰彦さんも到着した。

室工大の前身は1939(昭和14)年に新設された室蘭高等工業学校(室蘭高工)。その初代校長が吉町太郎一博士(橋梁工学の権威)で、現在の北大工学部(前身は北大附属土木専門部)設立に携わって、初代工学部長を務めた後、室蘭高工に着任した。

同じ時期、室蘭高工に抜擢されて赴任したもう一人が佐藤久次教授(化学)で、1940(昭和15)年10月29日付『北海道帝国大学新聞』に、開校直後の室蘭高工と周辺の様子をまとめて寄稿したのが、「室蘭の一年」である。

「学校の校舎や寄宿舎、官舎等は目下建築進行中で、各科第一第二学年合計四百人近い生徒数を擁し

ている。機械科、電気科、工業化学科、採鉱科、冶金科の五科で各一学年の定員四十名。講義に於いては絶対的自信を持っているが、仮校舎では技術者に最も必要な実験及び実習を課する設備が無いのは、大なる悩みである。(略)打開策として今年の夏期休暇に北大当局の御好意により、工学部、理学部並びに予科等の諸設備を拝借して、各科第二学年に実験実習の授業を行なった訳である。全校生徒六百人全部を収容する寄宿舎の落成も迫っているが、この水元町は室蘭高工敷地に選定される迄は農家数戸が点在した場所で、札幌なら圓山の奥の幌見峠か十二軒澤付近に相当する山間の谷間である。落成迄、全生徒は仮校舎へ約三キロメートルの悪路を徒歩通学する訳である。設立後僅に一年余り、第一期生も全課程の半ばに達したばかりである。」と酷い学校環境の苦勞を報告。

「室蘭は六月下旬から八月下旬迄約二ヶ月間の濃霧に襲われる。工都と自ら呼ぶ如く、非常時日本に最も要求されている石炭の町であり、鐵の都会である。日鐵と製鋼所(日鋼)の鐵冶金、鐵製作事業の二大工場の発する騒音と煤煙、埠頭に到着する数百数千台の石炭貨車の大群は室蘭の象徴である。」(概略)と伝えている。

時まさに国家総動員法(1938)発令の真っ只中。満州事変(1931)勃発以来の戦時体制下で軍需産業が急伸展し、理工系学生の不足から工科系学校を急きよ全国に増やす必要に迫られた時代だった。

1939年に、室蘭高工のほか盛岡、多賀、大阪、新居浜、宇部、久留米の7校の官立高等工業学校が設立された。道内では唯一、室蘭に誕生したが、工都の地の利を生かした人材育成を目的としたものだった。

戦後の1949(昭和24)年に室蘭工業専門学校(1944年に室蘭高工から改称)は新制大学昇格に際し、北大附属土木専門部を包括し室蘭工業大学が開学した。したがって室工大は北大の“姉妹校”

と言える。以来 70 年余り、工業界の技術者育成、輩出に貢献している。

そして今、航空宇宙技術の粋を集めた超小型人工衛星は、未来への大きな夢をのせて、刻々と宇宙から電波を送り届けてくる。最先端技術で奇跡を起こした学生たちに、吉町校長や佐藤教授、そして草創期に苦闘した先生たちは、宇宙時代の夜明けを感じ

て感慨無量に違いない。

なお、吉町太郎一校長をたたえる「吉町坂記念碑」が室蘭市水元町に、胸像が北大工学部前庭に建立されている。

【参考文献】

- ・大阪府立大学ホームページ
- ・「室蘭工業大学 70 周年」『室蘭民報』特集記事（令和 2 年 2 月 29 日）

活動報告

「ミウラ折り」について

平成遠友夜学校・ハンズオンボランティア 山岸博子

ミウラ折りは、三浦公亮東京大学名誉教授が 1970 年に考案した折りたたみ方です。

その特徴は、規則正しく連なる平行四辺形の対角の二つの角を開いたり閉じたりすると、一瞬のうちに全体が広がったり閉じたりするのです。

構造は、緩い角度で山折り、谷折りの折り目をつけると、縦方向、横方向へ展開・収納がいとも簡単にできるというものです。すでに応用されて地図のたたみ方にも利用され、製品化されたものが市販されています。

三浦教授は、かつてアメリカの NASA の研究機関に滞在中、超音速機の破壊研究における円筒状の構造物の破壊の観察から、破壊後も規則的な形状が残っていることを発見しました。この形状を応用した缶体は素材を 30 パーセント節約し、強度も変わらないことから、飲料メーカーがコーヒーなどの飲料物の缶体に利用して市販しています。こうした研究が「ミウラ折り」へとつながりました。

宇宙空間に浮かぶ宇宙ステーションの大型太陽光電池パネルを地上から運ぶとき、パネルをできるだけ小さくたたみ、さらに展張に際しては、ワンアクションで全体が同時に広がらなければならないが、ミウラ折り構造に由来する動作のスムーズさがこれを可能にしたのです。

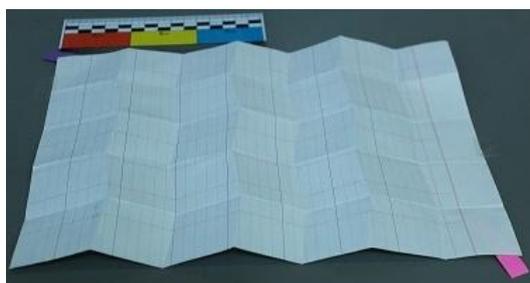
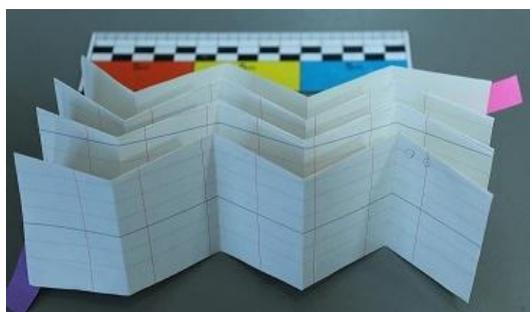
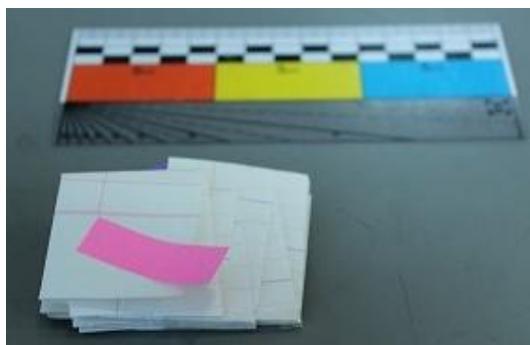
ミウラ折りは、日本の伝統と先端技術を融合させた日本らしさを持つ「日本様式」とされ、2006 年経済産業省の「新日本様式 100 選」の一つに選ばれています。

「ミウラ折り(miura-ori)」は、英国の British Origami Society によって名付けられました。

【参考文献】

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』 他

「ミウラ折り」



活動報告

ボランティア活動を振り返って

編集委員長 星野フサ

2002 年初夏のころ中野 系さんからボランティアの会の運営を箕浦名知男先生に頼まれたと連絡があって以降お手伝いが始まりました。

2002年12月18日付けのボランティアの記録「北大ボランティアについて」は、以下のようにある。

1. 名簿の確認 (各グループリーダーは名簿から抜けている人、脱会している人、活動の継続意思の有無)、1月までに最終名簿を作成する。2. 2月下旬に総会の開催。3. 組織の「案」として①正式な認可、②組織の正式名称は会長の希望で「北海道大学総合博物館ボランティアの会」とする。4. 会長からのメッセージとして、①会員の「意見の集約」、②横糸の強化 (親睦を含め、他グループの活動を知る) ③ボランティア室の設置、④共通の問題点や要望事項 (博物館の方針に関することは別)、⑤メーリングリストの作成と使用開始、5. 新会員の募集、6. その他とある。組織として、会長は久万田敏夫、事務局は中野 系、笠原明子、星野フサ、グループ責任者は、植物標本一学生：村上麻季、一般 (I)：与那覇モト子、一般 (II)：竹林順子、地学一鳥本准司、植物リスト一濱村寿史、考古一笠原明子、展示解説一塚本清蔵、化石一相原大介、昆虫一大島一正とある。また、90名の登録者の名前、所属、メールアドレス、電話番号、備考が記されています。

2003年2月21日16:00~17:00に2階の共同研究室で総会が開催され、会則の審議が行われ承認されました。各グループ責任者の抱負も述べられ、その後、懇親会がありました。総会は先生方、事

務の方、受付も加わって賑やかでした。司会は、中野さん、記録は星野で大学ノートに各先生方の発言などが記されました。

私はこの年、高橋英樹先生の植物体系学教室の研究生でした。大原昌宏先生のご指導でボランティアニュースは望月 直さんのお力添えにより2005年2月に第1号が発行されました。望月さんの後は、安田 正さん、そして児玉 諭さん、そして最近山岸博子さんが組版の大変なお仕事を快く引き受けいただき、めでたく60号の発行に至った次第です。

第3号には、2005年7月2日~8月27日に開催されたシベリア・マンモス展の開催を伝えています。久万田会長に責任者を命じられた中野さんはボランティアを午前担当と午後担当の仕分けについての抱負を語り、寺西さんは解説員泣き笑いと題して感想を述べています。子供たちが熱心に見ていて一生の思い出として展示内容が記憶に残されたであろうと福田正己先生は記しています。マンモス展の見学者は3万7千人であったとのこと。博物館の展示について講習会を開いていただいた内容をボランティアニュースの4号から9号に掲載しています。



左側は総会でスピーチをする久万田会長
右は在田一則新会長 (2006年第5号)

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 60

- ◆ 編集人：北海道大学総合博物館 ボランティアの会 (編集委員：星野、今井、大山、須藤 久末、山岸)
- ◆ 発行人：在田一則
- ◆ 発行日：2021年6月1日
- ◆ 連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ ボランティアニュースは、バックナンバーも含め、総合博物館ホームページからご覧になれます。
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>